

「ハムレット」に於ける〈魚屋〉の意味

猪 俣 浩

(1)

Pol. How does my good Lord Hamlet?

Ham. Well, God-a-mercy.

Pol. Do you know me, my Lord?

Ham. Excellent well. You are a fishmonger.⁽¹⁾

云うまでもなく、上の台詞は、*Hamlet* 二幕二場で、本を読みながら登場した Hamlet に、Polonius が探りを入れようとして話しかけた時のやりとりである。この‘fishmonger’で、ハムレットは何を云おうとしたのだろうか。

既に余りにも有名で古典的と云ってよい註は、John Dover Wilson のそれである。⁽²⁾ 彼に拠ると、fishmonger=fleshmonger（肉体を売る者）の洒落がここにあり、即ち bawd（ぜげん）の意味になる。幾つかの傍証が挙げられている。例えば、Malone の註から採ったものだが、当時のパンフレット作者 Barnaby（或いは Barnarbe）Rich の *Irish Hubbub* (1617) に “senex fornicator（老いばれの姦淫者）, an old fishmonger” とある例や、Ben Jonson の *Masque of Christmas* (1616) の中で、Venus が ‘tirewoman’（仕立屋）に扮して登場し、‘fishmonger’s daughter’ だと言うことなどがある。⁽³⁾

もちろん、こういった解釈は Wilson が最初ではなく、多かれ少かれ先人の註に含まれている。例えば、C. H. Herford の a fishmonger = a seller of woman's chastity などがその典型的なものである。（それに加えて、S. T. Coleridge がサジェストしたように、「秘密を釣り出すもの」という意味も当然考えられよう。）⁽⁴⁾ Wilson 以後の諸版は、大体この性的な意味合いの解釈を踏襲しており、それに他のニュアンスを加味するといった形が一般的である。例えば、Willard Farnham の註には、fishmonger=seller of harlots, procurer (a cant term used here with a glance at the fishing Polonius is doing when he offers Ophelia as bait) とある。⁽⁵⁾ ただし、比較的新しいテキストの一つ New Penguin Shakespeare に於ては、「おそらくは、ポローニウスから発しているらしい腐臭に言及したもの」⁽⁶⁾とあり、“though the word is sometimes thought to imply *bawd*.” とつけ加えられている。文章の順序からして、fishmonger=bawd の解釈を第一とはしたがらぬようである。

‘fishmonger’ について詳細なコメントをしたのは、最近出版された The Arden Shakespeare 版の Harold Jenkins である。Jenkins は Wilson と同じく B. Rich を引用し、“an old fishmonger, that many years since engrossed the French pox…” からすると、fishmonger は、自ら性的放埒に耽る男である、と云う。この語が普通云われているような bawd を意味する証拠にはいささか乏しいが、⁽⁷⁾ そうした方が、娘 Ophelia を王子に ‘loose’ しようとするポローニウスへの当てつけとして、コンテキストによく符合する、とする。そして Jenkins は、“the trade of the fishmonger was a particular stimulus to breeding.” ということに注目する。Sir Hugh Platt, *The Jewel House* (1594) には、次の文章が見られる。「塩は生殖を促進する。何故なら、塩は情欲をかきたてるのみならず、多産をもたらすからである。…女性は男性との交渉が無くとも、塩をなめただけで懐妊する。このことが、魚屋の妻たちを好色にし、美人にする。」⁽⁸⁾ ここでは、salt—sea—fish の連想から、fishmonger's wives が

「ハムレット」に於ける〈魚屋〉の意味(猪俣)

好色とされるのであろう。また、Eric Partridge のシェイクスピアの性的表現研究の中にあるグロッサリ⁽⁹⁾では、salt=Lewd, lascivious であり、シェイクスピアの他の作品からも、具体的な例が幾つか挙げられる。

“…his salt and most hidden loose affections…” (*Othello*, II. i. 239)

“All the charms of love,/ Salt Cleopatra, soften the wan'd lip!” (*Antony and Cleopatra*, II. i. 20-21) (Italics mine)

一方、Jenkins は触れていないが、筋子や数の子をみれば解るとおり、数多い魚卵というものの暗示する多産性も、ここでのやりとりに潜んでいるはずである。fishmongers' wives は、容易に fishmongers' daughters に置き換えられ得る。fishmonger > daughter > breeding というシークエンスで、ハムレットの唐突な “Have you a daughter?” が出てくることになる。

- (1) テキストは *Hamlet*, ed. Harold Jenkins (The Arden Shakespeare), Methuen, 1982. を使用。他の作品の引用もなるべく Arden 版に拠った。
- (2) The New Cambridge Shakespeare, 2nd ed., Camb. U. P., 1936, pp. 170f; J. D. Wilson, *What Happens in 'Hamlet'*, 3rd ed., Camb. U. P., 1951, p. 105.
- (3) 原文は次のようである。“Venus…he (=Cupid) came a moneth before his time, and that may make him somewhat imperfect: But I was a Fishmongers daughter.” (*Ben Jonson*, ed. C. H. Herford, and Percy & Evelyn Simpson, Oxf. U. P., 1925—52, VIII, 441) このコンテキストでは、fishmonger's daughter=harlot とは、にわかには断じ難い。ヴェヌスが自分の多産性に言及しているともとれる。
- (4) “Coleridge: That is, you are sent to fish out this secret. This is Hamlet's own meaning.” (A New Variorum Edition, ed. Horace Howard Furness, rep. Dover, 1963, I, 145)
- (5) *William Shakespeare: the Complete Works* (The Pelican Sh.), rev. ed., Baltimore: Penguin Books, 1969.
- (6) Ed. T. J. B. Spenser, Penguin, 1980, p. 251. Cf. “*King*. O, my offence is rank, it smells to heaven.” (III. iii. 36)
- (7) fishmonger = bawd 説に対する疑義は、M. A. Shaaber, “Polonius as Fishmonger”, *Shakespeare Quarterly*, XXII (Spring 1971), 179—81. に見られる。

(8) Quoted, Jenkins, pp. 464 ff.

(9) *Shakespeare's Bawdy*, rev. ed., Routledge & Kegan Paul, 1968, pp. 177 f. Cf. *OED* 'Salt' *a*² 1b.

(2)

さて、以上のような様々な含蓄を踏まえた上で、もう少し踏みこんでみようと思う。‘fishmonger’は、更に多義的であるように私には思えるからである。

まず、fishmongerを魚の売り手に限定することなく、fishermanの役割も担っていると仮定しよう。この仮定が何故許されるかと云うと、エリザベス朝の商売の状況からである。現代のように、商品の直接の生産者と、加工業者、流通業者、小売業者などが、劇然と分かれている状態ではないことが、容易に想像されよう。当時、テムズ川の魚を捕って暮しを立てていたものが少からず居り、魚を捕える人が直ちにそれを売る人であっても構わないであろう。fishmongerが、魚を捕える行為とアソシエイトしているからこそ、Coleridgeのコメントや、Farnhamの註が出てくるのである。しかも、ポロニアスの背後にいる王自身も fisherman なのだ。王の奸計から逃れたハムレットは、王が‘Thrown out his angle (釣針) for my proper life’ (V. ii. 66) と云う。

fishermanのニュアンスを含んだものとして、この言葉を考える場合、私の脳裏に浮ぶのは、一つの図像である。それは、Cesare Ripa (1563—? 1623) の *Iconologia* のページに埋もれていたものである。

Ripa の *Iconologia* の第一版は、illustration なしで、1593年ローマで出版された。そこでは、或る一つの観念を体現する allegorical figure の説明が、アルファベティカルに配列されていた。次いで1602年ミラノで第二版が出、そして1603年に Ripa 自身が出版したものに、初めてイラストレーションが付けられた。この年は、*Hamlet* の最初の四折本 (Quarto) が出版された年でもある。これ以降の全ての版は、イラストが入ることになる。好評のため、様々な版が各国で出版され、その影響は大きかった。^{*} Erwin Panofsky はこの本を

「ハムレット」に於ける〈魚屋〉の意味（猪俣）

‘*summa of iconology*’と呼び、Émile Mâle にならって、「十七世紀・十八世紀の寓意を解く鍵」と云っている。⁽¹⁾ 現在入手しやすいのは、Johann Georg Hertel 版の復刻本である。⁽²⁾

Hertel 版は、十八世紀にドイツのアウグスブルクで編まれたものである。二百に余る full-page illustration がその特徴で、最大最美の版と云われる。Maser の序文に拠ると、Hertel 版は1603年版を忠実に追うと共に、それ以降の追加も含めている。説明文には、その拠った版とページが記されており、根本的な内容は同じと考えてよいだろう。

その No. 127 に、Falsitas (Deceit) がある。(挿入図版参照) 前面やや左寄りに、狡滑な微笑を浮かべた老女が立ち、顔から仮面を持ち上げている。彼女の体を覆うローブにも、幾つかの仮面が附けられている。彼女は更に山羊皮と漁網を肩にかけ、長い釣竿を手を持っている。足もとには豹らしい動物が、頭を前脚の間に突っこんでいる。前に置かれた花束と見えるものは、蛇で成り立っている。或いは、花束の中に蛇が隠れている。

仮面が欺瞞 (deceit) のシムボルであることは、誰しも容易に見てとれよう。また、蛇も創世記の神話をもちだすまでもなく、同じように用いられている。⁽³⁾ 特にこの図柄を想い出させる表現が、シェイクスピアにある。Lady Macbeth が夫 Macbeth に、偽りの態度をとるように勧める。“‘…look like th’ innocent flower,/ But be the serpent under’t.” (*Macbeth*, I . V . 64—5) ⁽⁴⁾

難解なのは、山羊皮と豹の意味するものであるが、Ripa の解説には次のようにある。「山羊は sargo (一種の魚) に深く愛されているので、Alciatus に拠れば、抜け目のない漁師 (fisherman) は、のぼせ上っている魚を網にかけするため、山羊皮を身にまとう。こうして偽瞞家は、無邪気や愛情の外見を装って、うっかりものを引っかける。このことで女の持っている釣竿も説明される。…

「豹は自分の頭を隠し、美しい斑紋のある背中だけを見せ、それに惹かれるものをおびきよせては、飛びかかって餌食にする。」⁽⁵⁾

「ハムレット」に於ける〈魚屋〉の意味（猪俣）

FALSITAS

*Ioab, quod ab eodem fratre suo implacabile odium
in Abnerem susceperat, eum invidus interfecit.*



Die Falschheit.

*Abner hat es nicht erwogen
wird durch Ioabs Ruch betrogen.*

「ハムレット」に於ける〈魚屋〉の意味（猪俣）

この図像と説明文を観れば、fishing が〈欺瞞〉と結びついているのは明らかだろう。^{**} シェイクスピアが実際に Ripa の本を見たかどうかは、この場合あまり問題ではない。十六世紀から十七世紀にかけて、ヨーロッパでは、emblem book の出版が隆盛を極めていたし、この流行はイギリスでも同様だった。⁽⁶⁾ シェイクスピアが何らかの emblem book を手にとらなかったとは考え難い。⁽⁷⁾ そうでなくても、こうした観念や寓意が同時代に存在した以上、同じものがシェイクスピアの頭の中にあったことは確実だろう。そうだとすれば、ハムレットがポーニアスを「魚屋」だと云った場合、上に述べた意味を読みこんで然るべきだと思われる。ハムレットは「お前は、おれをひっかけようとしている嘘つきだ」と云っているのだ。

- (1) Erwin Panofsky, *Meaning in the Visual Arts* (orig. pub. 1955), rep. Univ. of Chicago Press, 1982, p. 163. Ripa の書物のイギリスに於ける popularity を示す一例を挙げる。エリザベス一世の肖像画の中で著名なものの一つとして、女王が虹を右手に擲んでいる、いわゆる 'Rainbow' portrait (ca. 1600) が、ロンドン郊外の館 Hatfield House にある。この肖像画のシムボリズムと *Iconologia* との関係が、F. A. Yates によって取りあげられている。Frances A. Yates, "Allegorical Portraits of Queen Elizabeth I at Hatfield House", *Astrea: The Imperial Theme in the Sixteenth Century*, Penguin, 1977, pp. 215—19.
- (2) *Baroque and Rococo Pictorial Imagery: The 1758—60 Hertel Edition of Ripa's 'Iconologia'*, intro. and tr. Edward A. Maser (Dover, 1971); cf. アンドレ・マソン「寓意の図像学」(André Masson, *L'Allegorie*) (文庫クセジュ) 末松寿訳、白水社, *passim*.
- (3) 例えば、ロンドンの National Gallery にある Bronzino (1503—72), *An Allegory* では、〈欺瞞〉を表す、下半身が怪物の少女の足もとに、仮面が二つこがっている。また、ルネサンス及びそれ以後の美術で、脚の代りに蛇のとぐろを持つ人間は、deceit, fraud, slander の象徴であった。Cf. R. M. Frye, *Milton's Imagery and the Visual Arts*, Princeton U. P., 1978, pp. 121f.
- (4) Cf. *A Dictionary of the Proverbs in England in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, by Morris Palmer Tilley (Univ. of Michigan Press, 1950), S585 'Snake in the grass'.

- (5) 以上の説明は1603年版からのものである。1603年版の挿画は、Hertel 版と多少異り、女の脚はライオンで、さそりの尾を附けている。しかし釣竿を持っていることに変わりはない。Vide Samuel C. Chew, *The Pilgrimage of Life* (1962), rep. Kennikat Press, 1973, pp. 99f.
- (6) E. g., Geoffrey Whitney, *A Choice of Emblems* (1586) ; Henry Peacham, *Minerva Britannia* (1612) ; George Wither, *A Collection of Emblems, Ancient and Moderne* (1635). シェイクスピアの作品に対して、iconological な方法でアプローチした書も現れている。数例を挙げると、Russell A. Fraser, *Shakespeare's Poetics, in Relation to King Lear*, Routledge & Kegan Paul, 1962; John Doebler, *Shakespeare's Speaking Pictures : Studies in Iconic Imagery*, Univ. of New Mexico Press, 1974.
- (7) See Jean Seznec, *The Survival of Pagan Gods : The Mythological Tradition and Its Place in Renaissance Humanism and Art*, Princeton U. P., 1972, pp. 314f.

(3)

更に、fish につきまとうもう一つのイメージを掘り起してみよう。

Pieter (或いは Peter) Bruegel the Elder (?—1569) の有名な版画に、次の題のものがある。

‘Big Fish Eat Little Fish (Les gros poissons mangent les petits)’ (1556; printed 1557) ⁽¹⁾

題名はフランドル地方の諺だが、その他にも、“Fish are hooked through fish.” “One fish is caught by means of another.” “Little fish lure the big.” など幾つかの諺がある。⁽²⁾ 画面中央の浜辺に巨大な魚が横たわり、大きなナイフを持った男がその腹を裂いている。大魚の腹と口から、餌になった無数の魚が溢れ出ているが、それらの魚も、それぞれ別の魚を口にくわえたり呑みこんだりしている。水中の魚も、自分より小さな魚を餌にしている。また、大きな貝が魚に噛みついていて、浜辺の突端には、われわれの予想したように、魚を釣っている男が描かれ、釣竿につけた餌は、やはり魚らしい。後ろの樹には、腹を裂かれた魚が何匹も吊り下げられている。

このイメージは、シェイクスピアにとって決して無縁ではない。

「ハムレット」に於ける〈魚屋〉の意味（猪俣）

3. *Fish*…Master, I marvel how the fishes live in the sea.

1. *Fish*. Why, as men do a-land : *the great ones eat up the little ones*. I can compare our rich misers to nothing so fitly as to a whale : a' plays and tumbles, driving the poor fry before him, and at last devours them all at a mouthful. Such whales have I heard on a' th' land, who never leave gaping till they swallow' d the whole parish, church, steeple, bells, and all.

(*Pericles*, II. i. 26—34) (Italics mine)

（漁師の三「親方、海ん中での魚の暮しにゃ驚くね。」

漁師の一「人間が陸でやってるのと同じさ。大きな魚が小せえのを食うんだ。金持ちのけちんばは、鯨にたとえるのがびったりよ。奴はのたうち廻って目の前の可哀そうな餌を追っかけ、挙句にゃ一口でぱっくり。そんな鯨の話は陸の上でも聞いたぜ。教区、教会、尖塔、鐘、何もかもそっくり呑みこまなくちゃ治まらねえんだ。）」

また、*Sir Thomas More* の手稿の中で、ほとんどシェイクスピアの自筆であることが確実な部分に、次のようにある。“…men like ravenous fishes/ Would feed on one another.”⁽³⁾

このように、〈貪欲〉〈弱肉強食〉のイメージが fish につきまとっているのは、ほぼ確実である。下手をすれば、ハムレットも呑みこまれてしまうのだ。

ハムレットの云う「魚屋」には、好色、多産、売春、生殖、悪臭、そうしたイメージだけでなく、われわれの今まで視てきた意味—欺瞞や弱肉強食—を見出しても、さして見当外れとは云えないだろう。むしろ、それらを積極的に読みこむべきではなかろうか。ハムレットが、王の正体を突きとめようと、行動を開始すると、ほとんど同時に、Claudius 側もハムレットの真意を探ろうとして、スパイ活動を活発化する。ハムレットは孤立し、周囲はことごとく敵である。いつ致命的なわなにはまるかも解らない。そういう危険な立場に立たさ

れた青年の、鬱屈した思いが、‘fishmonger’の言葉となって噴き出したのだ。この劇に於て、ハムレットの発する最初の言葉‘A little more than kin, and less than kind.’（I. ii. 65）とちょうど同じように、それは錯雑した様々な意味合いを、すさまじい圧力によって一気に一つの表現に凝縮させ、他の人物に対して、思いがけない謎として提出されるのである。

- （1） H. Arthur Klein, *Graphic Worlds of Peter Bruegel The Elder*, Dover, 1963, p. 138. Cf. Tilley, *op. cit.*, F 311 ‘The great fish eats the small.’
- （2） 諺の流行は十六世紀に最高潮に達し、ルターやエラスムスがこれをよく利用したことが知られている。ブリュゲルも諺の愛好を共有し、有名な *Netherlandish Proverbs* (1559) を描いているが、画面右上の川で、やはり魚が魚を吞んでいる。Cf. Walter S. Gibson, *Bruegel*, Thames & Hudson, 1977, pp. 65—75; オットー・ベネシュ (Otto Benesch) 「北方ルネサンスの美術」前川誠郎他訳、岩崎美術社, pp. 118f.
- （3） II. iii. 96—97 (*W. Sh.: The Complete Works*, ed. Charles Jasper Sisson, Odham Press, 1954, p. 1246).

補註

- * ルネサンス美術において、いかに Ripa がポピュラリティと重要性を持っていたかは、次の論文に詳しい。D. J. Gordon, “Ripa’s Fate”, *The Renaissance Imagination*, Univ. of Calif. P., 1975, pp. 51—74. 及びエミール・マール「ヨーロッパのキリスト教美術—12世紀から18世紀まで」柳宗玄他訳、岩波書店, pp. 347—351.
- ** fishing と欺瞞の結びつきは、「ハムレット」の本文にも姿を現わしている。ポロニアスは云う，“Your bait of falsehood takes this carp of truth.”（偽りという餌がこの真実という鯉を釣り上げる）（II. i. 63）

（英米文学科 教授）